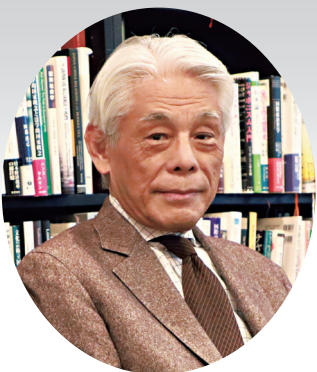


第二次世界大戦終結より80年。戦争を直接体験した世代が少なくなるなか、いまだ不穏な時代は続き、世界各所での紛争や軍事衝突が絶えることはない。このような現代において文化芸術の果たすべき役割とはいかなるものなのか？元文化庁長官であり現在近藤文化・外交研究所代表を務める近藤誠一氏に特別寄稿を寄せて頂いた。

◆特別寄稿◆ —戦後80年の今を見つめて— 文化芸術の力を再考する



こんどう・せいいち

1946年神奈川県生まれ。東京大学教養学科卒。元文化庁長官。パリオECD（経済協力開発機構）事務次長、駐米国大使館公使、ユネスコ日本政府代表部大使等を歴任。退官後、東京大学、慶應義塾大学等で教鞭を執った他、東京藝術大学客員教授を務める等文化・芸術の発展、国際交流に貢献し、瑞宝重光章、フランス国レジオン・ドヌール・シュバリ工章を受章。現在近藤文化・外交研究所代表、国際ファッション専門職大学学長。

人類は古来争いを繰り返しながら、「平和」を望んで来た。そして80年前、戦争を完全に禁止する国際連合ができたとき、誰もがついに理性の力によって戦争はこの地球上から消え、永遠の平和がくると信じた。しかし今の世界は、国連が想定していたものとは程遠い。人類は神に禁じられた木の実を食べて得た「知恵」によって道具や言葉、テクノロジーを発明し、高度な文明を築いたが、それらは大きなマイナスの結果をもたらしている。自然の生態系の破壊、自らの社会の分断と殺し合い……。

『永遠平和のために』を書いた18世紀の哲学者カントは、人間は「利己的な」本性によって争いを繰り返すが、いずれ自然の摂理が、平和に向かう人間の本性に作用して「永遠平和」を保証すると述べる。しかしその後文明が進化しても、人のこの奥にある支配と富を求める欲望は進化するどころか、最新のテクノロジーを利用して果てしなく拡大し、それが愚行を生んでいる。民主主義という美しい理念体系をつくった理性も、感情をコントロールできない。禁断の木の実を食べると人間は「死ぬであろう」との神の予言は実現するかも知れない。国連ができた1945年、それを予見したひとたちがいた。ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の創始者だ。ユネスコ憲章には次のような下りがある。

政治的・経済的合意は、加盟国の利害が一致するときには機能しないのだ。だからユネスコの創始者たちは、文化や教育における強い連帯の仕組みをつくることを提唱した。これは人類の長い歴史を振り返れば当たり前のごとくであることに気づく。700万年前に生まれた人類は、草原で肉食獣の攻撃や食料不足により生き残ることが困難だった。しかしゴリラと違って家族単位を超えて、群れの規模を拡大することで生き残ることができた。そしてその力となったのが文化芸術だ。言葉を発明する前から、美術や祭りによ

政府の政治的及び経済的取極のみに基づく平和は……永続する誠実な支持を確保できる平和ではない。よって平和は、……人類の知的及び精神的連帯の上に築かなければならない

平和はいつ来るのか？

近藤誠一

国境や文化を超えてすべてのひとを

結び、目先の利害を超えた連帯へと向かわせる仕組みなのだ。それは我々の祖先の生き残りの知恵なのだ。

こうした力を育む美術展や文化交流は、何としても継続させねばならない。筆者が理事長をしている横浜市芸術文化振興財団が昨年行ったトリエンナーレが、中国人のカプルの総合ディレクターの下で、何のトラブルもなく大きな成功を収めたことは、その身近な例である。

今年は己巳の年。蛇が脱皮して大きく成長するように、国際関係の痛みを乗り越えて新たな前進を目指す年だ。そしてその目的が「平和」であることは疑う余地がない。

（近藤文化・外交研究所代表）



第8回横浜トリエンナーレ「野草：いま、ここで生きている」プレス内覧会出席者撮影：加藤甫